
社内恋愛

みねお涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

社内恋愛

【Nコード】

N3789T

【作者名】

みねお涼

【あらすじ】

仕事をしているといろんな出会いがある。でも、それはとても狭い世界。その中で、あたしたちは恋をする。「社内恋愛」をテーマにした、いくつかの短編小説。

理想のキャリア

「早く辞めればいいのに」

悪気はないのだろう。

だが、その言葉に腹を立てている。

その事実気づいて、作業する手が止まった。

「小出？」

隣のデスクから、先般の台詞をはいた男性が声をかける。

小出みちるは、は、と平静を取り戻す。

「ごめんなさい、なんの話でした？」

「営業部の田中さん、妊娠したらしいって話だよ」

「あ、ああ」

おめでたい話だ。

経理部に勤めるみちるにとって、営業部は花形の部署だ。
入社し4年。

キャリア志向の強いみちるにとっては、経理部よりも魅力的な仕事場だ。

そこに配属されている女性は少ない。

男性的な職場環境に加え、体力的にも女性には不利だとされている。

「結婚だけならまだしも、子供ができちゃったんなら仕事に支障が
でるな」

話題の田中さんは、今年期待の新人として入社した。

まだ、入社して半年。

5ヶ国語が堪能で、日本一の大学をトップレベルの成績で卒業した
と聞いている。

なぜこんな中小企業に就職したのか、部外者の知るところではない。

だが、そんな彼女だからこそ、会社は入社してすぐの結婚にも反対せず、異動もさせなかった。

何に、腹を立てているというのか。

「ていうか、仕事したくてうちに入ったんじゃないのかね？なんで避妊しなかったんだろ」

先輩社員の独り言に近い話を聞きながら

「そうですね…」

みちるは無難な返事をくりかえす。

「だいたいよー？いくら妊娠中でも仕事できるっていつても、デスクワークだけじゃないんだし」

「…はあ」

「フォローする他の社員にも負担がかかると思うんだよねー」

「まあ。でも、産休もとれますし」

「えー？ありえない！」

ありえない。

「会社と他人に迷惑かける前に辞めろって感じ」

ダン！

「これだから保守的な男っていやなのよ！」

空になった中ジョッキを、勢いよくテーブルに叩きつけた。

「…うん」

「生中！追加！」

みちると同じテーブルで酒を飲んでいたゆうこは、彼女の様子に若

干身を引いて返事をする。

ゆうこは、同じ会社の同期で総務部に勤務している。

急に飲みに行こうと誘われ、会社近くの居酒屋で女二人で晩酌中だ。かくかくしかじかと昼間の次第を話してやると、ゆうこは「うーん」とうなった。

「エリート部署で、期待の新人で、妊娠ねー」

「そこじゃない！」

みちるは、人差し指を突き立てる。

「なんで結婚して妊娠したら仕事辞めろっていわれなきゃなんないの！」

「…別にあなたの事じゃないじゃん」

「だいたいさ！田中さんも辞めたいわけじゃないのよ！」

「知らんし」

「なんで、なんで仕事がしたいのに辞めないといけないわけ！？」

「…まだ、辞めるわけじゃないんでしょ？それに、入社してすぐ結婚、半年で妊娠って、あたしからしてもありえないけど」

同じ性別の同期にまでありえないなどといわれては、みちるの勢いもにぶる。

「仕事したいんなら、そこんどこもコントロールできるんじゃないの？」

「でも、何の関係もない男にまで言われたくないと思わない？そんなんだから、世の女性は産休とつても仕事復帰できないのよ」

みちるは、一生懸命弁明する。

「それはそうかもしれないけどねー。昨今、旦那の給料だけでやっていけるとは思えないし」

「でしょー？」

みちるの目の前に、次の生が運ばれてくる。

ぐび、と口をつけ喉をうるおして、次の話題を振る。

「てゆうか、田中さんってなんで営業部なんだろ。ゆうこ知ってる？」

「知らないわよー。それだけ期待されてるんでしょ？インテリのお嬢様だし」

「旦那さんってどんな人なんだろう？」

「あ、なんかどこぞの大富豪らしいよ」

「なに、その不明確な情報」

「医者かなんか？」

「ふーん」

「聞いておきながらそこは興味ないの」

「旦那さんは、どう思ってるのかしら」

「ん？仕事のできる女を妻にして、鼻が高いか、仕事を辞めて家庭に入ってほしいか？」

「…大富豪なら、奥さんに仕事なんかさせないよね」

「わかってるじゃん」

「身重の妻を仕事というストレス環境にさらしておく必要、ないもんね」

「もしあたしが旦那で、お金持ちだったら、間違いなく仕事辞めろっていう」

「世の中、そんなもんなのかしら…」

「すべてがそうではないと思うけど、大富豪じゃなくても、身重の妻はいたわりたいでしょ」

田中さんが休業するにしろ、退社するにしろ、営業部は臨時で人員を補充するか、他の社員で田中さんの仕事をかけ持つだろう。

入社したてとはいえ、少なからず社内外で仕事をこなしている。

女性だからといって、コピーや資料作成だけやっていたというわけがない。

あの営業部だ。

定時に帰ることなど稀な部署。

残業代の計算もしているから、それは分かる。

「田中さん、可愛いそう…」

生中の泡を眺めながら、みちるはそう思うしかできなかった。

「小出。僕と付き合わない？」

「はあ？」

あくる日の昼休憩。

当番で事務所に残っていたみちると、昨日、みちるにとっていけない発言をした先輩。

なんの前置きもなしに、その先輩社はとんでもない告白をした。

文字通りの告白。

「どこに？」

お約束なボケをかましてスルーしようとしたみちるだったが、先輩社員の真剣な眼差しに、それ以上にも言えなくなる。

「このタイミングであたしに何を言うんですか？」
うすうす気づいてはいた。

彼の言動に「好意」があることは。

だけど、昨日の今日でそれはない。

「小出彼氏いた？」

「あの、あたしの話、聞いてます？」

「このタイミングだから、告白してみたりしているんだけど」
なんて男だろう。

呆れてものも言えない。

「新入社員のおめでたい話題に便乗」

おめでたいなんて、昨日の発言にはそんな考えちらりとも感じ取れなかった、とは言えない。

「結婚して妊娠したから仕事辞めろなんて言う人、あたしが好きだとでも？」

「…なに、怒ってる？」

「怒っていません」

「小出」

強く名前を呼ばれ、体がこわばる。

「俺、お前も俺の事少しは好いてくれてるんじゃないかって、思ってたけど。勘違い？」

か、と顔に血が集まるのが分かった。

よくも。

昼休憩で部署には他に誰もいないからとはいえ。

よくも。

「俺は、小出が好きだよ」

よくも。

「返事は？」

よくも。

「男の人って…勝手です」

気分がわだかまる。

「ん？」

「あたしは、本当はバリバリ仕事したいんです。ある程度はお給料もらって、重要な仕事して、満足したいんです」

「今もしてるじゃん、仕事。経理も、立派な仕事だよ？会社にとって重要な部署だ」

「…楽しく仕事がしたいんです」
よくも。

「俺は、俺の隣に小出がいるから、仕事が楽しいよ？」
よくもそんな台詞を。

「ずるい」

鼻声になる。

「あたしの理想はそんなじゃないんです」

「んー？どんな」

男が苦笑している。

ティシューを一枚、差し出している。

「仕事ができる、ブランド物のスーツをさらっと着こなして、アフ

ターではおしゃれなバーで素敵な彼とお酒飲むの」

「お酒、好きだね」

差し出されたティシューを受け取り、目元にあてる。

マスクラが落ちないよう、そっと。

「そして、結婚して、子供産んでも、仕事と両立していつかみんなが憧れるキャリアウーマンになるの」

「ふーん。だから怒ってたのか」

だから怒っていた？

あたしが何に怒っていたって？

「小出、俺がお前の理想に反してて、落胆したんだ？」

「なんでそんなポジティブ思考なんです!？」

「ふふ、鼻水出てる」

「ちよっ!」

みちるは慌てて鼻を覆う。

「もう一枚、ティシューくらさい」

「ん」

音をたてないように、慎重に鼻の下もおさえる。

「小出さ、俺の考えに幻滅したん？」

みちるは答えられない。

図星だったから。

「言い方は間違ったかもしれないけど、俺は、他人に迷惑をかけるくらいなら、仕事なんてするなって思う」

「なんでですか…」

「お前もそう思うんだろう？仕事ができる女になりたいって」

「…どういう意味ですか」

「ん？全部言わないと分からないか？」

「負担になるからですか」

「違う。仕事ができる人なら、他人に協力されても迷惑はかけないって持論があるから」

男は笑った。

男、多田はみちるの座る椅子をくるりと回した。
自分の正面を向かせる。

「君が、俺の意見に落胆してお怒りだったってことは、俺にとっていい意味かな？」

「ずるいです」

みちるは、上昇していく自分の脈拍を感じた。

俯きたかったが、まっすぐ見つめられて動けなかった。
涙がこぼれた。

仕事がしたいと願う一方、結婚して、幸せな家庭を築く、そんな夢を見た。

この、多田という先輩社員と。

自分の理想を打ち砕くような彼の意見に、正直怒りを覚えた。

なんてバカな夢を、見ていたんだらうと自分に落胆した。

自分の願望をかなえられる相手であってほしいという、淡い祈りこそ、自分勝手だと。

「俺は、君の理想も大事にしたいけど、自分の気持ちを譲る気もない」

「結婚したら、辞めろってことですか」

「俺が君を好きだって気持ちは、譲らない」

胸が、締め付けられる。

「君が仕事を続けるというなら、俺は協力する準備はあるってこと」

「俺と、これからの未来をスケジューリングしない？」

「するい！」

「はいはい。泣かないで」

「子供みたいに扱わないでください」

「ごめん」

苦笑。

「仕事ができる女になるんだもんね」

「やっぱり、ずるくて勝手です！」

多田の、暖かな手が。

みちるの手を取った。

その後。

あたしはまだ仕事を続けている。

結婚して、子供を産むかどうかは、まだ未定だ。

合コン(前書き)

以前、ネットで公開していた作品です。若干加筆しております。

合コン

「ねえ、ミツコ。明日の合コン、参加できない？」

「ええ???明日!??」

就業時間も近づくカウンターの中で、ミツコは急ぎよ、脳内でスケジュールリング作業に入らざるをえなくなった。

オフィスビルの案内業務は、すでに暇つぶしの時間になっていた。常に、雑談と来店した客の噂話で消費されていく時間。

「明日って...」

「予定、やっぱりあるよね？」

「...いや...予定はないんだけど...」

「女の子が一人足らなくてさ」

「...」

「ほんとにごめん!!彼氏とかいても構わないからさ!!」

「うん...。いいよ。何時？」

断る理由が思い浮かばず、ミツコは了承していた。

翌日。

控え目におしやれして、ミツコたちは職場を後にする。

「そっいえば...、相手ってどこの人たち？」

「言っでなかったっけ??」

ルンルン気分のサヨに引きずられるように無理やりテンションをあげながら、ミツコは早足になる。

「実はー、うちに出向してる会社の社員さんとか、契約社員さんを集めてみました!!」

「ええっ!?!」

「へへへ。女の子は総務課と経理から集めたよ」

「…人脈広いんだ、ね？」

出向社員にまでつてがあるとは、恐るべし。

「受付って特権は、聞かないでも相手が名乗ってくれる点にありま
すー!!」

明るいサヨのコミュニケーション能力と情報収集能力に感心してい
ると、どうやら会場に到着したようだ。

「遅くなってごめんなさーい!!みなさん集まっていますか??」

幹事然としたコメントを振りまくサヨの後ろで、ミツコは控え気味
に顔をだして会釈する。

同じ会社内に勤めているらしい男性陣の顔を見ても、名前が出てこ
ない。

どの部署に勤務しているのか、サヨはきつと全員覚えていたのだろ
う。

イケメン揃いだ。

女の子も、まあまあかわいい所が座っている。

こちらは、ミツコの見知った顔。

総勢10名の、少し大きな規模の合コンがスタートした。

「そういえば、席ひとつあいてますね?どなたか遅れていらっしや
るんですか?」

ミツコの素朴な問いに、男性陣から尽かさずフォローが入る。

「ごめんね、一人トラブルで残業になつてさ。代わりに僕が入つて
る部署の人、呼びましたんで」

「あ、そうなんですか…」

「数合わせなんで、って、こんな言い方申し訳ないですけど、いい
男ですから」

「はあ」

あまり気にしないでほしいと、ミツコは思ったが、愛想笑いをして
料理を口に運ぶ。

あ、おいしい。

と、息を切らせた客が店に入ってきた。

「ごめん、遅れて!!」

「あ、ユウジさん、こっちこっち!!」

男性の一人が手をあげて、遅れて来た「数合わせの男」を呼び寄せる。

「…え??」

ミツコが顔をむけると、そこには見知った男が。

男の方も、一瞬表情をこわばらせたのがわかる。

だが、場の雰囲気気を気にしてか、互いに視線をはずす。

この男性の事は、ミツコも知っていた。

開発二課の佐々木ユウジ。

主に個人向け商品の開発と商品管理を行っている部署に勤務している。

気まずい雰囲気醸し出さないように、ミツコはおとなしく料理に箸を伸ばし続ける。

ユウジも、適当に場の話を合わせながらアルコールを流し込んでいた。

たまに、二人の目が合う。

だが、会話はない。

「ねえ、ミツコちゃんって、今いくつ?」

合コンも終盤に差し掛かり、適度なコミュニケーションも深まりだしたころ。

「彼氏いるの?」

「え、いえ…」

「え、じゃあさ、フリー?こんなに可愛いのもったいないな。メアド教えてよ」

「は、はあ」

「カラオケいこ？」

「いえ、実家住まいなので、あまり遅くなるのは……」

「いいじゃん！家に電話しなよー」

ほろ酔いの男性が（自己紹介されたが、興味がなく名前も思い出せない）ミツコの肩を抱く。

「ミツコちゃん、仲良くしてー。はい、携帯だしてー」

にへらにへらと笑いながら、しつこく体を摺り寄せせる。

「いえ、えっと、ホントに携帯はちよっと今充電ないので……」

ガタン！

急にユウジが立ち上がった。

「どうしたんですかあ？」

酒も入り上機嫌のサヨが、しなをつくってユウジに寄り掛かる。

「ごめん、俺、帰るわ」

「ユウジさん？どうしたんですか？」

堅い表情で、ユウジはミツコを見下ろす格好になっていた。

眉間にしわが寄っている。

「で、この子、お持ち帰りするからあとよろしく」

そう言い放つと、ユウジはミツコの腕を取って無理やり席を立たせた。

「えっ」

一瞬。

何が起こったのか理解するのに時間がかかった。

ユウジは、財布から無造作に札を数枚抜き取ってテーブルに置いた。

「じゃ。来週、会社で」

「ちよ、ちよっと……！」

ぐいぐい引きずられて行く最中、ミツコは片手で「ゴメン」とジェスチャーするだけで精いっぱいだった。

しばらく。

無言で歩くユウジについて行きながら、ミツコはなんだかこそばい気持ちになっっていた。

たばこに火をつけるため、ユウジの手が離れる。

「合コン、なんで断らないのさ」

「だって、サヨの頼みだしさ……」

「サヨって、受付のキャバ嬢だろ？彼女の企画する合コンって、絶対口クなことないだろ」

「キャバ嬢って……。ちよつと化粧が激しいだけじゃない……」

ミツコは、合コンに誘われた経緯を報告する。

ユウジは、同じ会社の先輩だった。付き合い始めて3か月。

社内恋愛なだけあって、まだ誰にも明かしていない秘密の恋人。

「ドタキャンしろよ」

「……付き合いってあるんだよ。女の子にも」

「彼氏いるって言えばいいのに」

「……もしかして、妬いてる??」

「ちげーわ、ばあか」

言って、タバコの煙を吐き出すユウジ。

そんなしぐさもうれしくて、ミツコは「ふふ」と幸せな気分になる。

「ユウジだって、来たじゃない……」

「ふーん、上げ足とるなんていい度胸だな」

「ごめんね」

一応、謝って。

二人は今夜最初のキスをした。

ときめき・前篇

【ときめき】

リサは、映画のチケットを握る指先に力を込めた。折れないように、破けないように、だけど、強く。終業時間が近づく。

今夜は、決意を形に変える日だ。

営業時間の長いレストランの勤務体制はもちろんシフト制。

残業は当たり前で、なかなか8時間勤務というわけにはいかないが、正社員も同様だ。

といっても、リサが務めるレストランには正社員は2人しかいない。店长と、料理長だけ。

深夜3時までの営業時間を支えるために、契約社員が何人かいる。

リサはその一人だった。

外食産業の勢いも鈍り始めた昨今、昨年の売上比には若干及ばなくらいの成果が続く。

事務所でごまごまとした雑務を片づけていると、雑誌を眺めていた料理長が呟いた。

「あー、この映画もう公開されたのか…」
30歳を少し過ぎた、まだ若い料理長。

リサは、書類を片づけながら料理長が眺めていた記事をのぞきこんだ。

そこには、話題の3Dを効果的に演出に取り入れたと評判の映画の紹介が掲載されていた。

「料理長、映画好きなんですか？この映画、評判ですよね」

「んー、なかなか観に行く機会ないけどね」

料理長はやわらかな笑みを口元に浮かべ、リサを見る。

「一緒に行く？」

「え？」

思いがけない提案に、リサはキョトンと目を丸くした。

「明日、俺早番だから21時には仕事終わるし。つつても、もう観た？」

実は公開初日に観た、とは言わない。

「いいですけど…、いいんですか？」

「何が？あ、レイトだから遅くなるけど、こっちこそそれでもいいなら」

時間が遅いことは問題ない。

明日は、シフトも休みだ。

「はい、大丈夫です」

「わかった。じゃあ、明日は残業しない」

そう言って真剣に明日の業務確認を始める料理長。

問題なんて、何もない。

あるとすれば、憧れの男性との映画観賞というシチュエーションに、何を着ていくか悩むくらいだ。

リサは時計を確認した。

21:10

映画が始まるのは21:40だ。

店の駐車場。

料理長はいつも原付で出勤しているし、リサも自転車だった。

ここから映画館まで、タクシーで15分といったところか。

チケットは購入済みだが、間に合うか、微妙な時間。

タクシーを呼ぼうか迷っていると、制服に上着をはおった料理長が

裏口から出てきた。

リサを見つけて、片手を上げる。

「ごめん、ちょっと引き継ぎしてて」

「いえ。タクシー、呼びますか？」

「いいよ、今日は車で来たから」

料理長が言つと、駐車場の端に停めてあったコンパクトカーのヘッドライトが点滅する。

「乗って」

リサは、緊張気味にドアノブに手をかけた。

乗り込むと、料理長は後部座席に置いておいたらしいシャツを出して、着替え始めた。

更衣室らしい設備のない店舗では、男性陣の着替えなど見慣れてはいたが…。

ち、近すぎる！

激しくなる動悸を抑えつつ、リサはちよこんと座席に座る。

誰も乗っていないかのような、新しい乗り心地。

「さて、行きますかー」

車が、静かにエンジンを起こして走り出した。

「リサちゃん、今年いくつになった？」

運転する料理長にうつとり気味だったリサは、不意の質問に声が裏返る。

「へっ！？に、24です」

「なに、どうした」

「い、いえ、料理長は今年32でしたっけ」

「そうねー、小学校分くらい違うねー」

「まだまだ若いですよー」

「うん？なんだそのフォローー」

たわいない会話。

笑いが混ざる会話。

少し、リサはうれしくなった。

映画館に着くと、ロビーは若干のにぎわいを見せていた。さすが話題の映画の上映前、といった風だ。

「料理長、チケット」

リサが差し出したチケットを見て、料理長は少し驚いた表情になった。

「買っててくれたの？」

「はい、混んだらいけないから」

リサの気遣いを受け取りながら、さらに加える。

「それと、外で料理長はやめて。恥ずかしいから」

「え。あ。すいません…でも」

「雅紀」

「え、名前ですか!？」

「だって、寅って名字だと、どっかの下町のおじさんみたいじゃん」

「まあ、そうですね」

リサも、職場のみんなも、「寅さん」とは呼びにくく「料理長」と呼ぶのはその為ではあるのだが。

リサは心の中で絶叫する。

「恥ずかしすぎる！」

「はい、呼んでごらん」

まるで子供を手懐けるかのような声かけ。

「…ま、さき、さん」

「んー？ま、60点かな」

「なんの点数ですかっ」

「はは、まあまあ、ドリンクとポップコーンいるよね？」

映画が始まるまで、あと10分。

カップルや夫婦だろうか、周りには男女の二人組が目立つ。

料理長もそれに気付いたのか

「おひとり様って少ないんだね」

そう小声で呟いている。

「あたしも普段は一人ですけど、やっぱり夜だからですかね」

「俺たちも、傍から見たらカップルに見えるんじゃない？」

何かのトラップでも仕掛けられているのか。

リサは胸の前で両手を堅く握りしめた。

緊張しているのを悟られたくない。

「やだ、そうですかね」

どきどきが止まらない。

上映前の薄明るい館内で、ちらりと料理長を盗み見る。

短く整えられた髪は、いつも自分で切るんだと話していた。

まっすぐで、濃い眉と、長いまつげが、スクリーンの光を吸収して

鈍く光っている。

少しだけ伸びたあご髭を気にしているのか、アゴ先で長い指が左右

に動いている。

がっちりとした肩と、大きなフライパンを支える腕。

男らしい筋肉の付いた体。

それが、プライベートという特別な時間で、すぐ隣にある。

リサは、手が触れてしまうのではないかと緊張して、上映中はポツ

プーンに手を伸ばすことができなかった。

「面白かったな」

上映が終わったころには、深夜0時を回っていた。

「リサちゃん、今日はありがとう」

「いえ、そんなお礼なんて、あたしの方こそありがとうございます」
「お腹すいてない？」

「りよ…じゃなかった。雅紀さんは？」

「ちよっとだけ」

「お店、寄りますか？」

「えー、いいよー。どっか別のところ行こ？」

そう言いながら、料理長はスマートフォン画面を操作し始めた。

「…この辺だと…牛丼屋か、居酒屋くらいしか開いてないな」
飲食店情報を検索しているようだ。

「あ、牛丼屋って行ったことないです…」

「ほんと？学生の時も？行く？」

「はい！行きたいです！」

料理長とふたりで外でごはんを食べるシチュエーションがあるとは。は。

想像していなかった展開に、テンションがあがる。

ふたたび料理長が運転する車に乗った。

ステアリングを回す腕だけが、ちらちらと視界に入る。

映画館から牛丼屋までの道のりはあつという間だったが、その間、リサは体を硬くしたまま動けなかった。

牛丼屋の店内は、深夜だからか若い男性ばかりだった。

ノーマルに牛丼の並を頼んだりサ。

料理長は小うどんのついたセットを食べている。

「夜中の牛丼ってうまいよな」

そんな事を言って、にこにこ上機嫌のようだ。

「リサちゃんって、普段自炊してんの？」

「え、ああ、まあ、ある程度は」

「へえ、何つくるの？」

「…煮物とかが多いです」

「お、家庭的だね」

「いえ、だつて材料切つてお鍋に入れるだけですから簡単なんです」
「今度、食べさせてよ」

「えええ！？」

思いもよらぬ申し出に、大きな声が出てしまった。
途端、恥ずかしくなつて肩を縮める。

「そんな、専門家に食べさせられるような味では……」

「いやいや、こんなチェーン店の料理長なんて専門家でもなんでも
ないよー」

料理長は「ははは」と短く笑う。

もそもそと牛丼を口に運びながら、それを咀嚼する。
初めての牛丼屋。

想い人と一緒。

ロマンチックでもなんでもないけど、うれしくて仕方ない。
それに。

自分の料理を食べたいと言ってくれる。

こそばゆい気持ちになる。

そして。

ついに丼は空になった。

「ごちそうさま」

そう言つて、料理長が財布から札を一枚抜いた。

さつさと立ち上がり、レジカウンターへ行くとさつさと会計を済ま
せている。

リサは慣れないカウンターの丸椅子からよたよたと降りると、慌て
て料理長の後を追つた。

自動ドアの前で、料理長が待っている。

「あの、お金……」

「いいよー牛丼くらい」

軽く手を振り、料理長はまた笑う。

店を出ようと二人を、店員が呼びとめた。

「お客様、これ、彼女さんの忘れものです」

「え」

二人の足が止まった。

ときめき・後篇

店員が、ハンカチを差し出している。
それは間違いなくリサのハンカチ。

「…ありがとうございます」

受け取りながら、顔が熱くなっていくのが分かる。
料理長の顔を見れない。

意識し過ぎるな。

動悸が、体の外にも聞こえているのではないか。
そんな気がした。

自動ドアが開いて、外の空気がリサの体を包む。

「さて、送るよ」

そっと、料理長の手がリサの背に触れた。

どきん

無言で。

料理長の隣を歩く。

おさまらない動悸。

うまく、歩けない。

なんだか、意識しまくっている状況にいたたまれなくなる。

やっと助手席に乗り込んで、息をつく。

「ご、ごめんなさい」

震えた声が出た。

「ん？なんで謝る？」

「いや、えっと、その」

くく、と喉で笑い、料理長がエンジンをかけた。

「彼女、だって」

リサは、ぎゅっとこぶしを作った。

「ははは」

リサの口から乾いた笑いが出る。

「やっぱ、そんな風に見えるんだねー」

料理長は、何も気にしていないかのようだ。

「ごめんなさい」

もう一度、謝る。

カチカチ鳴るウインカーの音に、リサの鼓動が重なる。

「…どうして？」

「だって、なんか、申し訳ないです」

「何が」

顔が上げられなかった。

「もー、聞かないでくださいー」

体を折り曲げ伏したかったが、ブレーキを踏まれているのか、シートベルトによって体がシートに固定される。

どうしようもなくなる。

きつと、自分の気持ちは全開で放出中だ。

恥ずかしすぎる。

信号で車が止まった。

ひと時の無言。

深夜の道路は、スムーズに二人が乗る車を運んだ。

間もなく、職場であるレストランの駐車場に着いた。

ゆっくりとタイヤが止まる。

「…」

「…」

何か言わないと。

「今日はありがとうな」

料理長が先に言葉をかけた。

ぼんぼん、トリサの頭に大きく暖かな手が乗せられた。

「家まで、送ろうか？」

「…あ、いえ、えっと」

そつと、自分の両ほほを包みこんだ。

大丈夫。

熱くない。

そつと、胸に手を当てた。

大丈夫。

普通のどきどき。

「大丈夫です。自転車あるし」

「そ？」

「あの、今日はほんとごめんなさい」

また、謝った。

それから、やっと料理長の顔を見る。

「」

動けなくなった。

なんで。

なんで。

料理長の顔から、表情が消えていた。

疲れているのか。

いや、そんな感じではない。

人形のような。

無表情。

「あ…のさ」

その感情の感じられない顔から、言葉が出る。

「なんで、謝るの？なにに謝ってるの？」

なんで。

「今日、楽しかったんだけどな」

きゅん、と。

胸が締め付けられる。

「俺じゃダメってこと？」

「な…に」

「俺、リサちゃんと恋人同士に見られたいよ？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「あたしも！」

勢い。

告白していた。

「やっと、言ったね」

「え」

料理長の顔に笑顔が戻る。

「俺も、リサちゃんを誘えるタイミング、探してた」

ゆっくりと、リサの体の緊張がほぐれ、逆に心がどきんどきんときめきを始める。

そつと。

料理長の手がリサの髪をとく。

「傍から見たら、ちゃんと恋人同士に見えるんだって、安心した」

それは、あたしがときめきオーラを発していたからでは、と。目をそらしながら恥いる。

「リサちゃん、明らか俺のこと好きなのに、なんで謝るのかわかんない」

「やだ、やっぱり分かってたんですね」「
恥ずかしすぎて、それでも。」

ときめく。

「ね、本当の恋人同士にならない？」

ときめく。

「社内恋愛はばれちゃうといろいど問題もあるけど」

ときめく。

彼の言葉ひとつひとつに。

「俺は、リサちゃんが好きだよ」

ときめきが。

体中に満ちていく。

「返事を、聞かせて？」

リサは、髪み絡む雅紀の手のぬくもりを感じた。

返事は、決まっている。

唇が。

自然にその形になるのを。

雅紀の唇がそっと閉じ込めた。

後輩

はじめて彼を見たのは、配属資料の写真だった。短く、リクルーターらしく整えられた髪。真面目な眼差し。ブルーストライプのネクタイ。

「新入社員の高槻です。よろしく願います」

朝礼でそう挨拶する実物を見たときも、なぜか配属資料の写真に見えた。

「あの、御崎チーフ」

おずおずと声をかけてきた後輩社員、高槻貴志を私はぼんやりと見上げる。

叩いていたキーボードから手を離し、「なあに？」と優しく返した。高槻は、胸の前に資料を抱えていた。

表紙をうかがうに、取引先の過去の受注データだ。

「この資料、お借りしてもよいでしょうか」

それは私が許可するようなことではないと言いたかったが、社員ならば誰でも見ることができるとのことなので

「いいわよ」

と、了承する。

「でも、何するの？」

「こちらの取引先がどのような傾向で商品発注をかけてくださっているのか分析しようかと」

「ん？課長にそんな仕事しろっていわれた？」

「いえ、ただ興味がありました」

興味という彼の顔は、やはり写真のようだ。

表情が変わらないわけでも、動かないわけでもないのに。

「…どんな興味か知らないけど、あまり時間をかけないようにな」
新入社員に振り分けられる仕事はたいして多くはない。

まあ、いいかと思い、私は許可と同時に彼の行動を観察することに
した。

私には、彼の行動のほうに興味深かった。

彼の配属から半年が過ぎた頃。

彼が彼女と別れたという噂が社内に広まった。

よくあることである。

学生時代とは違う。

社会人には社会人の時間がある。

しかし…。

よくよく観察していると、彼は人気があった。

昼休みには必ず部署内の誰かに昼食に誘われたいし、終業間近にな
ると若い女性社員から声をかけられている姿を目にする。

でも。

「御崎チーフに仕事頼まれていますので」

彼はたまに、そうやってアフターの誘いを断っている。

「私がいつあなたに仕事頼んだのかしら」

案の定、彼は今日もその常套句を使った。

残業しながら、彼の入れたコーヒーを飲む。

「記憶障害にでもなったのかしら」

「いやだなー、冗談きついですよ御崎チーフ」

高槻は、取引先からの年内最終発注書をデータ入力している。

入力されたデータの確認ボタンを押しつつ、ほう、とため息をつい
た。

「だって、仕事だって言えば大概しようがないってあきらめてくれるんですよ」

「あなたね…そんなだから彼女に振られるのよ」

「うわ、その噂みんな知ってるんですね」

入社したてのところよりも、柔軟に会話するようになった高槻。

若者らしい、軽い口調が社内に響く。

何列か先のデスクで、同じく残業中の社員が聞き耳を立てていることだろう。

彼は、知っているのだろうか。

別れたという噂と同時に、私と付き合っているのではないかという憶測が飛び交っていることを。

「あれ」

高槻が頓狂な声をあげる。

「どうしたの」

「なんか、画面がフリーズしたみたいで…」

「はあ？」

椅子を下げ、私は彼のパソコンをみる。

どれどれ、とパソコンに伸びる彼の腕の下から自分の腕を伸ばす。

パチパチと、エンターキーを叩く。

変化しない画面。

Ctrl Alt Del

タスクマネージャから、プログラムの起動を確認し、適当に処理すると画面は正常に戻った。

「おおお」

感嘆する後輩に、こちらは嘆息する。

「学校で習ってないの」

「大学の情報処理なんて、大したこと勉強しませんって、そうか、どうでもいいけど。」

私は自分の仕事に戻る。

「ありがとうございます、御崎チーフ」

彼は満面の笑みで礼をいった。

彼は。

知っているのだろうか。

私との恋仲を疑われていることを。

私が、そんな噂に気持ちを左右されていることを。

写真を見たときから、気になっていたことを。

「御崎チーフ、このあとご飯行きませんか？」

誘われたと気づくのに、一瞬かかった。

またたき。

「お腹すいてたんなら、さっきの誘い受けなさいよ」

「いやいや、僕は先輩を誘ってるんです」

「なに、この仕事の礼でもさせる気？」

「あはは、それでもいいです」

何なんだろう。

この後輩は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3789t/>

社内恋愛

2011年12月23日02時45分発行